

## 『何糞！』シャープの創業者、 早川徳次という大器

【ニートII(《に》げているひ《と》)】

過日、香港で旅行会社の社長をされているシュウ(周)さんが真成寺に訪問され、富山県には四日間滞在されました。彼と色々な事を語り合い、有意義な時間を過ごしました。周さんとの出会いは、東日本大震災の復興支援者の同志として宮城県で知り合いました。五十歳を少し過ぎた親日家の彼は、日本の復興の為に何か出来ないものかと、私財を擲って日本へ度々訪れておられる人徳の持ち主です。彼との会話の中で印象に残った言葉がありましたので、ここに御紹介させていただきます。

いま日本では『ニート』が深刻な社会問題となっている事は改めて申し上げるまでもありませんが、では『ニート』とは一体何の事を指すのでしょうか？日本政府は、『学生と専業主婦を除き、求職活動に至っていない者を若年無業者(ニート)』と定義しているようです。

元々この『ニート』は、平成十一(一九九九年)イギリスの政府機関が『教育、雇用、職業訓練に参加していない十六〜十八歳の若者に対する呼び

名(Not in Education, Employment or Training"という部分の**頭文字**をとり **NEET**(ニート)と略したものが始まり(≒定義した言葉でした。その『ニート』を周さんは次の様に表現されました。色々な煩わしいものや辛苦から『逃げている人(ニート)』…と。思わず笑ってしまったのですが、まさにそうだと思います。同じく『逃げている人』に該当するのは、『ひきこもり・言い訳が達者な人』などもそうだと思います。社会や家庭の事情など様々あるのも分かるので、一概に言えない部分もありますが、**他人責任論**で生きている人は、残念ながら『逃げている人(ニート)』に該当していくものと思います。そんな人生に光明が見えない方々には、次にご紹介する**早川徳次**の生き様を参考にして頂ければ何よりとお願いいたします。

【『何糞』精神で逆境に負けない生き様】

**早川徳次**(はやかわとくじ・明治二十六年〜昭和五十五年)は実業家であり、発明家でした。実業家としては**早川電機工業(現・シャープ)**を設立し、発明家としては**シャープペンシル**が代表的な業績としてあげられます。自身で様々な発明をしており、日本のエンジンと言われることもあった様です。常に「人に真似をされる物を作れ」と言い、事業の第一目的は『社会への奉

仕』と言い切っています。戦後間もなく失業者が働く為の会社を設立したり、働く女性の為の保育園経営も行いました。そんな**早川徳次**の逆境にも負けなかった人生をご紹介します。

シャープ株式会社の創始者、**早川徳次**は稼業の衰微と母親の病気の為、二歳半で貧家の養子に出され、五歳の時、養母にも死なれる。母親と二度までも引き裂かれ、相当ショックだった事でしよう。次に来た継母が**早川少年**を深く憎しみ、殴る蹴るは当たり前で、虐待などというレベルではありませんでした。真冬の極寒の中、井戸水をジャブジャブかけて、彼を放置したり、公衆便所の肥溜(こえだめ)の中に突き落としたり放置したこともあります。学校も「勉強なんかさせてやらん。働け。」というわけで、小学校を二年で中退させられました。これが偉大な人物の最終学歴となります。

【盲目の女行者、井上さんという命の恩人】

八歳の時、この状況を見かねた近所の「井上さん」という盲目の女行者が、**早川少年**の手を引いて、**銚(かざり)職の丁稚奉公**に連れて行ってくれました。『行者』というから修験道か何かを信仰されていたのでしょうか。晩年の**早川徳次氏**は「この時の井上さんの手の温もりを、私は生涯忘れる事ができな

い」と述懐しています。

銚職の仕事、金属加工は、男の子にとっては少なからず楽しいものだったろう。丁稚奉公先での仕事は「傘の金具作り」でした。黙々と仕事に打ち込んだ**徳次**は「若くして腕の良い職人」に成長した。手技を身につけた彼の最初の「発明」は、十九歳の時に**最初の特許**を取った、穴を開けないでベルトを締められるバックル『**徳尾錠**(穴のいらぬベルト)』を考案する。見るほどに見事な発明品であり大いに売れました。この製品が「特許」を取った事もあり、彼はこれで独立を果たす。独立資金を借金したものの借金は一ヶ月で返済してしまい、更に新たな発明品「水道の**道自在器**」を発明。これは、水道の蛇口を好きな方向へ向けることが出来る器具で、従来品に比べ設置が楽だった事が**大ヒット**に繋がる。順風満帆な彼は、結婚するや子宝にも恵まれ意気揚々だった。その勢いで生まれたのが二十二歳の時に発明した**シャープペンシル**です。これを「**早川式繰り出し鉛筆**」と命名し後々に世界中の人々の必需品となる。日米で特許を取り、事業は軌道に乗ってきた。事業は安定した拡大を続け、ついに四十万円(現在の価値で四億円)もの資金を築き上げる。ところ

が絶頂の彼を三十歳の時、関東大震災が襲う。関東大震災発生の一時間程前、彼は文子さん（妻）と二人の息子に見送られて家を出た。大正十二年（一九一三年）九月一日午前十一時五十八分、近代国家となって以来、経験した事のない強烈な地震が首都圏を襲う。お昼時だった為あちらこちらで火災が発生し、その熱風が渦をまいて強烈な上昇気流となった。彼の家のある本所の辺りは蒸し焼き状態となり、家も工場も一度に失った。そして彼の家族である。火が出た際に子供達をかばった為、文子さんは全身に大火傷を負っていた。炎と熱風に追われるようにして油堀（深川にある十五間川（じゅうごけんがわ）の通称）の中へと避難し、流されないよう堀の中の杭にすがりついた。六歳になる克己をおぶって九歳の熙治を抱えているのは辛い。だが、いくら待っても火の勢いは収まらない。意識が朦朧（もうろう）としてきた。ふと背中が軽くなったと思つたら、背中が流されていった。慌てて掴まえようと手を伸ばした途端、今度は熙治が流されていった。もう錯乱状態である。その後どこをどうさまよったのか、避難所となっていた岩崎別邸で彼と再会した時には、息も絶え絶えになつて

いた。「すみません、子供達を…」そう苦しうに言うと、あとはただただ泣くばかり。そして彼女も、この二ヶ月後に子供達の後を追つてあの世へと旅立つのである。幼い頃からさんざ辛苦を味わい、もう一生分苦労したからこれで後半生は幸せが待っているだろうと思つていた。事業の成功がそれを約束しているようでもあつた。それがまたしても暗転した。運命は余りにも彼に過酷でした。妻と子供、家と工場、全てを一瞬で失つただけではない。莫大な借金だけが残された。この借金を返す為に、彼はシャープペンシルの特許をも手放さざるをえなかつた。本当に彼には何も無くなつてしまつた。これほどの苦境に立たされても、彼は「何糞」と立ち上がった。この逆境から生まれたのが「日本初のラジオ（国産ラジオ受信機第一号。シャープラジオと名付け、商標登録）」である。震災の僅か二年後に成し得た快挙でした。しかし日本は戦争に負けた：戦後の混乱の中で「バタバタと倒産が相次ぎ」、彼の会社も倒産の瀬戸際に立たされる。それでも何糞と踏ん張つた。そしてその先には「未曾有の家電ブーム」が待っていた。勢いに乗るや彼の快進撃は止まらない。「日本初のテレビ」を開発するなど「日本初」を連発する。販売首位は「松下（現パナソニック）」に譲る

も、発明にかけては彼の「早川電機（現シャープ）」が抜きん出ていた。『業界初』の記録はなおも伸びた。東京オリピック開催前の昭和三十九（一九六四）年三月、世界初のオールトランジスタ電卓第一号機を発表。「カラーテレビや電卓」は彼の発明である。更には、太陽光発電までも視野に入れていたというほどの先見の明であつた。早くからグローバル戦略を意識していた彼は社名を「シャープ株式会社」に変更。これを機に彼は一線から身を引く。晩年彼は記号を頼まれた時《何糞（なにくそ）》と書くことがあつて人を驚かせたという。

【最大のライバル松下幸之助】

昭和五十五年六月二十四日午後十二時二十分、早川徳次は波乱の生涯を閉じた。享年八十六歳。自宅での通夜が始まる前に飛んできたのは、最大のライバル松下幸之助だつた。彼と一歳しか違わない幸之助は八十五歳。高齢な上に病気がちだつた幸之助は、秘書に両脇を抱えられるようにしながら入ってきたという。そんな体でも、すぐに弔問に行かねばならないと幸之助を思わせたのは、早川徳次あつての自分であるというライバルへの深い感謝と敬意だつたに違いないでしょう。

彼はあらゆる不幸に遭いながらも、物づくりの中に希望を見出してきました。

人生の希望というのは誰にも取り上げることが出来ないのです。竹は撓（しな）る。撓るけれども戻る。戻つた時にはもつと強くなつています。竹はどうして撓るのか？それは節があるからです。人間の節は苦勞するところ。苦勞をするから折れないんです。それがまさに早川徳次の強さだつた。彼は人生の苦難を強さに変えていった。我々が本当に学ばなければ行けないエッセンスがいくつも詰まつていと思います。

合掌 副住職 谷川寛敬

